

第2回国際オペレーションズ・リサーチ会議の報告

近藤次郎

私は1960年9月5日より9日迄の5日間、Aix-en-Provence, France の第2回国際オペレーションズ・リサーチ会議に日本代表の一人として参加することが出来ました。会議の内容については別に論文集が発刊される予定ですからここでは今後の参考として私見を述べて報告にかえることに致します。

(1) 第2回国際会議の開催地は、都塵を離れ閑静な小都市(日本なら静岡か奈良といったところ)で宿泊設備も十分あり、会場の Aix-Marseille 大学の設備も小規模乍ら、休暇中で全面的に使用出来たので申分なかつたと思います。ただ小グループで討論したり友達と談笑したりするようなロビーがもっと広いとよかつたと思います。

論文のフルペーパーが既に仮印刷されていて発表は細かい部分を離れて本旨だけにし、討論者は予め本論文を読んだ後に質問したり意見を述べたりするという具合で能率的に進行したように思います。また司会者が大抵、熟達之士で発表論文を素材にして討論を中心に結論を見出して行くというようなやり方で国際会議の在り方は寧ろこのようにするべきだと思ひました。

全員が参加出来る総会は第1日の Some Methodological Aspects of Operations Research, 第4日の Computers and OR, および最終日の The Measurement of Human Factor だけで、最初のはORの定義のような討論が多かつたので三つとも大体通俗的で誰でも(専門家でなくても)発言出来るようなものにしたわけでしょうが、そのかわり部会の方は常に2~4の部会が併行的に開催されているために二つ以上の部会に関心があるときは選択に困る位でした。従つて部会の配置、組合せには余程研究して成可く異種的なものが同時に行われるようにするべきだと思います。

まる一日をつぶす遠足は半日にした方がよいと考へます。会議が盛沢山である上にかんじんの Aix 市そのものも見物の余裕さえない位でしたから参加者は手紙を書く暇もない位です。

其他の接待、リクリエーションはフランスの文化の粋を十分に見せて参会者を感激させました。

(2) 第3回の国際会議は1963年ノールウェーのオスローと決定されました。

これについて当学会でも今から準備しておく方が

よいと思います。日本OR学会は1961年に国際OR協会に参加を認められますから第3回からは正式に参加することが出来るでしょう。理事会では次回の開催地、分担金等について相当ははっきりした回答を求められるようですから日本OR学会でも次回には責任ある理事1~2名を派遣する必要があります。

日本のOR研究は国際的水準に達しておりますから日本で春秋開かれる研究発表会や Journal 等に発表された論文のうち優秀なものにはむしろ学会からも本人に国際会議に提出するよう奨励すべきだと思います。

今後は日本人の論文は当然日本OR学会が唯一の窓口になる筈ですから通信連絡に日本は時間がかかることを考慮に入れて1962年11月末頃までには日本代表を選出する必要があります。

日本からは旅費等の関係で論文は相当出ても実際に会議に参加出来る人数は限られますから、現地近くにいる会員に参加をすすめ代読を依頼する(これは余りよいことではないですが今回も若干ありました。但し代読者は質疑に十分答えられる必要があります)ことがよいと思います。

論文提出者は出来るだけ渡航するように努力すべきで、万一本人が行けぬ場合も考慮して予め代読者も交渉しておくことが必要です。このような処置をせず、論文が予稿集に印刷され乍ら本人または代読者が出席しないようなことは国際会議では嚴重に慎むべきだと思います。

(3) OR 国際会議を日本で行うことも将来は考えられます。

事実相当多くの方が日本へ来たい意志を表明していました。日本で行われる場合はアメリカからは軍用機やチャーター機で大勢参加されるでしょうが、欧州大陸からは費用の点で参加が多くは望めないでしょうから真に国際会議の名にふさわしくするためには汎太平洋各地やソ連等にも呼びかける必要があると思います。これらの国にはOR学会がなくしてIFORSに参加していないところもあるわけですから多少問題はあつたと思います。

また日本でやる場合、費用は別としてもわれわれが相当の実力を持っていることが必要で、アメリカOR学会を日本で開催したというような形にならないようにしては日本にはプラスになつたとして

もやはり国際的には醜態だと思います。

また IBM 等の装置により同時通訳をやる位の設備が必要でしょう。

しかし私はここで日本で会議を開くことについて反対または消極的な意見を述べているのではなくて、

6年後位には日本で国際会議をやる位の意気込みで今からお互いに努力したいと提案しているわけで、そのために多少とも参考になるような事を記録として留置きたいと考えている次第であります。

(1960年9月)

Weibull 教授のこと

近藤次郎

日本を出がけにオペレーションズ・リサーチ学会から依頼を受けたので、スウェーデン到着後早速近く来日を噂される Weibull 教授をさがすことにした。Waloddi Weibull 教授はストックホルム工科大学(KTH)の物理学科の応用物理講座の教授である。いや“あった”といった方が正しい。いろいろ調べてわかったのは、彼が1953年6月1日に退官して今は南の方の Brösarps というところに隠退しているということであった。彼はもともとスウェーデンの重工業 Bofors 社の技師で、1941年この会社の経済的援助で KTH に応用物理学講座が創立され、その教授になった。従って教授になってからの業績も Bofors の研究室で行ったものが多いが、測定器、衝撃波、デトネーション、金属の疲労破壊等の測定に関するものが含まれている。

彼の住んでいるところはストックホルムから600軒近くも離れていて、ちょっと会いに行くわけにもいかないので手紙で連絡して、日本へ行かれる前にストックホルムへ来られるならお会いしたい旨を伝えたところ、返事が来て“自分は1929年世界動力会議と国際機関会議(World Power Conference and World Engineering Congress)が東京で会ったとき日本に行って楽しい一ヵ月を過ぎた。この美しい国にもう一度行ってみたいと思っている。私は貴方がストックホルムにいる間に上京する機会はないが多分何処かでお会いできるであろう。私は明朝行ってジュネーブに行くが一週間程で帰って来る。4月の初めに私はアメリカへ数週間の予定で行くつもりで帰りは直接にジュネーブに向かい、そこで当分落ち着く予定である。5月の15日から19日までパリにおり、9月にはイギリスにいる予定である。”とやってきた。この大学は65歳が定年であるからもう72~3歳と思われるが仲々の元気で、引退していて恩給も年金も十分にある筈なのに何でそんなに忙しく旅行して歩いているのかわからない。航空に関する統計の論文をジュネーブから帰ったら送ってあげようと言ってきたので楽しみにしている。

スウェーデン人は出好きな国民で家でじっとしているのは嫌いな性分と見える。今年は3月31日から4月4日にかけてイースターの休暇があるが、スウェーデン人は昨年のクリスマスの頃からもう楽しみにして旅行の申込みをしている。従って、この期間は何処も満員ということであったが、まだ毎日の広告に、楽しい休暇にベルリン、ハンブルグ、パリ、イタリーへと旅行社の広告が出ているが、ストックホルムから車中または船中2泊、旅館4泊位で200クローネ(1万4千円)から飛行機による500クローネ(3万5千円)位の団体旅行の広告が新聞にいっぱい出ている。大学新卒の工学士が1,700クローネ位貰える国だからちょっとした小遣いの節約で気軽にヨーロッパの各地へ旅行できる。ちょうど日本という東京から北海道や九州旅行よりは手軽でまあ関西旅行といった程度である。もっとも日本のように奥さんは留守番で御主人だけ団体慰安旅行というわけには行かないから家族持ちはこの倍額程度の出費は覚悟なくてはならない。これだけでなく7月8月は商店は勿論、官庁や郵便局などでも休むか営業しても昼迄でこの間みんな休暇をとって遠くは南仏、近くも南の海岸などに旅行する。Vikingの血が多少は残っているらしい。従って Weibull さんも仕事と慰安の半々に旅行されているのかも知れない。また何かあったら通信するとしてこの“Weibull”に会わざる記によって約束を果たしたことにしたい。(3月22日記)